
神による戦闘生徒達

足利 灯尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神による戦闘生徒達

【Nコード】

N4478X

【作者名】

足利 灯尊

【あらすじ】

これは神が作り上げたバトルシュミレーションシステムに取り込まれ、日々を戦闘の毎日に生きる少年少女の物語…………

第一話

『続いてのニュースです。現在世界各国で13〜18の少年、少女が行方不明になる事態が起こっています。』

「ふーん……物騒な世の中になったわね」

昔の世の中なんて知らないのにそんなことを言っている、そんなあたしの名前は梅雨野 夏樹。高校一年。

「ふああ……そろそろ寝よ」

親もすでに床に就いて静かな部屋で独り言を呟き、自室にむかう。

「わあ……今日は綺麗な月ね……」

窓から見えていた満月にいつもは気づかない自然に感動する。

「って…え？なんか月デカくない？」

月が徐々に拡大されているように見えて焦るあたし。

「ちよつとちよつと……ヤバくない？」

すると突然、月が強烈な光を放った。あまりに強烈な光に目を開けていられなくなる。

「きゃっ…な、何？」

目を開けてみるとそこは身に覚えがない部屋だった。そこは広く、体育館ぐらいある。そしてそこにはあたしと同年代と思われる男女が50人ぐらいいた。

「えっ…あ…へ？」

「おっ…新人さんだ」

あたしの存在に気づいた一人の男の子が声を発する。

「はじめまして。ビックリした？俺の名前は前川 浩輝。君は？見たところ日本人みたいだけど」

「え…あ…梅雨野 夏樹」

「へへ。変わった名前だね。それにしても可愛いねイデアっ！！」

「新人さんをいきなり口説くな、エロキ」

いきなり後ろから前川といわれる男の子を殴って登場してきたのはあたしと同年代の女の子。

「私の名前はワン・メイリン。中国人よ。よろしく」

「ど、どうも」

よくみたら白人や黒人などいろいろな人種が入り乱れている。

「あ、あの……何がどうなっ」

「しっ。神の話が始まるわ」

「は？神？」

すると部屋の中央にモニターが出現した。

『はいはいどうも、神です。』

画面に映し出されたのは真っ黒のシルエット。男女の区別はできない。声を発するわけではなく、画面下に字幕がでるだけである。

『おやつ？また新たな参加者ですか。誰か彼女に説明をよろしく』

「エロキ。あんたがしなさいよ」

「はいはい。毎度のことですね」

ワんに命令され、しぶしぶ説明を始める前川。

「あんた、月の光を見たのは覚えてる？」

「えっ？う、うん。すごい光が急に」

「その光の所為であんたはいま月の中にいます。ここまでわかる？」

「えっ？うそ……ワープしたの？」

「おっ物分かりいいね。まあそんなところ。んで、これから俺た

「ちは戦場に行きます」

「せ、戦場っ！？戦場ってことは戦争っ！？月の中なのに？相手は何なのっ！？」

「理解してくれるのは嬉しいけど落ち着いて。んゝ戦争とはちよつと違うかなゝ。訓練っていったところだな。で、相手はモンスター。つとここまでは大丈夫？だいたいここでみんなパニックになるんだけど」

「……ちよつと待って。頭の中整理したいから」

「はいはいゝ」

（月の中っ？戦場っ？モンスターっ？何がどうなってるの？有り得ないよこんなの……。何であたしがこんな目に……。でも部屋に居たのにいきなりこんな所にいるなんてワープぐらいでしか説明つかないし、たぶんあの人の言ってることは本当。戦場ってことは命がかかってることよね……。真剣にならないと死んじやう。それは嫌！……よしっ！すべてを受け入れよう！）

「ごめん、待たせた」

「……ふーん。なかなかの面構えになってるじゃん。あんた結構肝が据わってるねゝ」

「ありがとう」

「で、戦場にはワープで転送されるから。ここに来たときみたいに。戦場はいろいろな場所があつて、ジャングルとか街中とか。武器は

転送されるときについてくるから」

「わかったわ。説明ありがとうね」

「いえいえ。お役に立てて光栄です」

（あたしは絶対生き残る！！）

第二話

「おいワン」

「気安く話しかけないで」

「何だよキツいなあ。あの娘、大物かもよ」

「奇遇ね。私も同じことを思っていたわ」

「最初は俺たちで援護するか」

「私はそのつもりだったけど、足引っ張らないでよね」

「はいはい」

だいたいの事態を理解したところでまたモニターに反応が。

『新人さん、わかってくれましたか？』

「ええ」

『それは良かった。では、ミッション開始です』

するとモニターが強烈な光を放ってあたしの視界は真っ暗になった。

「……………うん……………」

目を開けるとそこは砂漠地帯だった。辺りは夜のため薄暗い。

「ここが戦場……………」

「そうよ」

「ギャーーーー!!」

突然後ろから聞き覚えのある声が。

「すごい声ね」

「いきなり話しかけないですよ。戦場って聞いて神経質になってるんだから」

「クスッ。あなた面白いわね」

後ろから話しかけてきたのはさっきの少女、ワン。

「で、ワン？何その服？」

ワンが着ている服は革ジャンのような生地で、体のラインがハッキリ、大事なところ以外はわかってしまうようなピッタリしたスーツ。肌は顔しか見えておらず、色は真っ黒で灰色の細いラインがところどころに張り巡らされている。

「ああ、これ？これは神がくれた戦闘服ってところかしら。あなただって着てるじゃない」

「え？」

自分の身体を見てみると確かにワンと同様のスーツを着用している。

「あ、ほんとだ。すごい、これ……全然着心地がない。でもなぜか安心感がある」

「ま、最初は私も驚いたわ。でもこのスーツがすごいのはそれだけじゃないのよ。暑さ寒さはもちろんのこと、防護機能が施されてるんだから」

「防護機能？」

「このスーツを着ていたら死にくいつてこと。他にも身体能力の上昇とか筋力の上昇なんかもするの」

「へ、へへ。そんなにすごいんだ」

すると突然視界の端にモンスターの名前と画像が出現した。

「な、何これっ！？」

「今回のミッションよ。今回はこの6体を倒したら帰れるみたいね」

「これがモンスター……バツみたいなヤツとか、トカゲみたいなヤツとか気持ち悪い……」

「モンスターを倒したら経験値が貰えるわ。経験値をためてレベルを上げていくの」

「レベルを上げると、能力が上がるの？魔法が使えるようになるのか」

「そんなわけではないじゃない。一定のレベルを超えたら新しい強力な武器を貰えるのよ、神から」

「えっ？それだけ？」

「そうよ。結局神は自分の力で強くなった兵士が欲しいみたい。ただ力を与えただけじゃ使えないものね」

「な、なるほど」

「じゃ、行きましょう」

そう言ってワンは走り出した。

「は、速っ。身体能力が上がってるからか…。よしあたしも！」

思った通り、あたしも今までよりも遥かに速く走れるようになっていた。

「おっ、スーツに慣れるのはやいね」

「ありがとう」

するとまた視界の端にモンスターの画像が映し出された。でも今度

は画像の上に大きくバツが記されている。

「おっ誰かがヤツたね」

「そ。モンスターの生存は随時報告されるの」

「なるほど」

「しかし、あんたすごく落ち着いてるわね」

「よく言われるわ。冷静沈着なのが夏樹の良いところだって。それにしてもこんなに走っても息一つ乱れないなんて……」

するとワンは突然急停止した。

「ちよつとっ!？」

慌ててあたしも急停止。ワンよりも少し前で止まった。

「でも、これを見ても冷静でいられるかしら？」

「えっ?何を言って……」

後ろを振り向くと巨大なトカゲの怪物がよだれを垂らしてこちらを覗いていた。

第三話

「グルル……」

「え……あ……うそ」

「夏樹！どいてっ！」

振り向くとワンがライフルのような銃を構えていた。咄嗟に左に飛び込み回避をはかる。

ズガンッズガンッ

「ギシャアア」

「足をやったわ！夏樹！今のうちにトドメを……！」

「えっ！？でもあたし武器なんて持ってないし……」

「『武器選択』って思ってみて、武器が選べるわ」

「わ、わかったわ」

言われた通りに『武器選択』と想像してみる。すると視界に武器の画像が映し出された。

「これね！えーっと……ってこれだけ！？」

表示された武器は『ツルギ』ただ一つだけだった。

「最初は誰でも一つよ。はやくその武器を出して！あいつにトドメを！」

「よ、よし！」

『ツルギ』を『選択』と想像してみる。すると手に全長1メートル程の日本刀式の刀が出現した。

「いやああああ！」

足を打ち抜かれて倒れていたトカゲバケモノに向かってジャンプしてバケモノの頭部を胴体から切断する。

「ガアアア」

雄叫びを最後にトカゲバケモノは頭部と胴体を切り離されて崩れ落ちた。

「や、やったわ」

「うわお。初めてなのにあんたすごいわね。それにしても女で距離離武器なんてあんたなんかやってたの？」

「うん。剣道を少し」

「ふーん。あんたがそんなに勇ましいのはその所為かしら。んっ？」

視界の真ん中に『ミッシェンクリア』と文字が出現する。

「終わったみたいね。さあ帰れるわよ」

突然、辺りがまた強烈な光に包まれてあたしの視界は奪われた。

目を開けるとさっきの大広間にワープしていた。

「あ……帰ってきた？」

「そうよ。もう大丈夫」

「あゝ！！大丈夫った？梅雨野さんっ」

向こうから前川の声が轟く。

「あっ前川君」

「ヤダな〜前川君だなんて。気軽に浩輝でいいのにイダァっ」

「エロキ！あんた二人で援護しようとか言っでどこ行ってたのっ」

「だって俺の転送された場所は離れてたから……」

するとまた大広間の中央にモニターが出現した。

『皆さんお帰りなさい。それではいつもの結果発表といきましょ
う』

「そ。今回のミッションで誰がどんな活躍をしたか教えてくれるの」

『岩木 和真・討伐2体・獲得経験値120p・レベル35にアップ』

「おっ岩木のヤツ、やるなあ」

隣で前川が感想を述べている。

「ねえワン」

「何？」

「レベル35ってすごいの？」

「まあ中堅つてところかな。ちなみにあたしは23だよ」

「ふーん」

なんて会話をしている間に何人かの名前が出ていたが見逃してしまった。

『最後は梅雨野 夏樹・討伐1体・獲得経験値40p・レベル4にアップ』

「おおー！梅雨野さんすげー！初めてでもう討伐？」

隣で驚いている前川。

『以上で本日のミッションは終了です。解散!』

その字幕が表示された瞬間、広間にいた人は一斉に後ろの扉に向かって歩き出した。

「さつ夏樹。私たちも部屋に行こっ」

「えっ？部屋って？」

「大丈夫。転送された人にはそれぞれ個室が用意されてるから。私が案内してあげるっ」

そしてあたしはワンに手を引かれて広間をあとにした。

「どう思う？あの新人」

「別に、興味ないわ」

「相変わらずお前は可愛い女の子にはキツいなあ。俺はド真ん中だけどな」

「ちょっとっ！？ワタクシというものがあるながら……」

「冗談だって。おい、お前はどっと思うっ？」

「…………俺には関係ない」

広間に残っていたのは男女二人ずつの4人組。なにやら不気味な威圧感を持った4人組だった。

第四話

「あっ！あつたあつた」

ワンに連れられて着いた場所は広間を出て徒歩5分のところだった。目の前にはあたしの名前がドアの真ん中に書いてあるマンションみたいな部屋だった。

「これがあたしの個室…」

入ってみるとリビングと寝室、トイレにバスルームがある、現代日本人の一人暮らし用の部屋だった。

「あとはナビゲーターがここの使い方を教えてくれるから。じゃ、私は自分の部屋でお風呂に入ってくるね」

そう言つてワンは部屋から出て行ってしまった。

「えっ？ちよつと！……ナビゲーターって？」

『それはあつしのことでありやす、お嬢様』

「きゃあっ！」

突然机の上に置かれていた携帯電話から電子的な声が聞こえてきた。

『はじめまして、あつしがナビゲーターと言われるもんでありやす』

「ケ、ケータイが喋った!？」

『失礼な。お嬢様はさっきのミッションでもっと非現実的なもんを見てきたでしょう?』

「そ、そうだった……よしっ、もう滅多なことじゃ驚かないわよ!」

『いい心掛けでやんすね!。よっ行動モード!』

ナビゲーターがそういうと携帯電話からコード状の手足が生えてきて起き上がった。

「あなた歩けるんだ……」

『じゃ、この部屋の説明をしやすぜ』

「ふーん……部屋の使い方は今の日本のマンションとほとんど変わらないのね」

『理解が速くて助かったぜ。じゃ、困ったことがあったらいつでも呼んでくだせえ!』

そういつてナビゲーターは机の上で待機モードに変形した。

「夏樹ー?入って大丈夫?」

「ワン？うんいいよ」

部屋に入ってきたワンを見てあたしは度肝を抜かれた。

「ワン！あなたなんて格好してるのっ！？」

ワンは風呂上がりのためかバスタオルを一枚羽織っているだけであつた。髪はまだ濡れている。

「誰かに見られでもしたら…」

「大丈夫よ。ここは女子寮だから」

「えっ？女子寮？」

「広間を出てたら道が二手に分かれてたでしょ？」

「そ、そういえば」

「あそこを右で女子寮、左で男子寮なの」

「そうなんだ」

「で、今日一日この生活を体験してみてどうだった？」

「正直、まだ困惑してる……。自分の部屋にいたのにいきなりこんなところにいる、あんなことに巻き込まれるなんて……」

「まあ、ここにいる人は普通の人よりも順応性がある人ばかりだけ

ど、それでも最初はみんな動揺してたわ。あなたはまだすごい方よ」

「ありがとう。そういえばワンって中国人よね？なんでそんなに日本語ペラペラなの？」

「わたしは日本語なんて話せないわよ。ここではどんな言語もその人の最も得意とする言語に変換されて伝わるの。だからわたしにはあなたが中国語ペラペラに聞こえてるのよ」

「へえ……便利だね」

「ここでの生活は慣れるまで大変だと思うけど、お互いに頑張りましょう」

「うん。よろしく」

『ここにワン・メイリンと梅雨野・夏樹のチームを認証します』

「な、なに？」

「神がわたしと夏樹が仲間として認めたってこと」

「チームになったらなにかあるの？」

「転送されたときに絶対一緒にいるようになるわ」

「それは頼もしいわね」

「じゃまた明日」

「
おや
すみ
」

第五話

「…………ふぁ…………朝か…………」

窓からの強い朝日で目が覚める。ちなみに月の中なのに何故日光が入ってくるのかというと、月の表面が車の窓ガラスのように外から見ればただの地面なのだけど、中からは外の様子が見えるという仕組み。だけど地球じゃないため青空はなく、太陽と宇宙空間しか見えない。そして、あたしたちが住んでいるこの建物は、月の中にある神に作られた空洞に存在している球体に建てられているらしい。つまり、月の中にまた惑星があるみたいなかたちになっているよね。

「一晩明けてもまだ信じらんないわ…………」

建物の外の様子は、ただ果てしなく手入れされた庭園が広がっている。誰が手入れしているのだろうか？

「テレビは……………ないんだっけか」

人間の一番の友がいなくなるともう暇になるあたし。

「夏樹ー？朝ご飯まだでしょー？」

「あっワン？うんまだだけど」

「じゃ、一緒に食堂に行こっ」

「食堂？」

「そう。この下に機械がシェフの大食堂があるのよ。だいたいみんなそこで三食を済ませてるわ」

「へえ、便利だね」

「じゃ、いつ」

ワンに手を引かれて、部屋をでる。広間に続いている道とは逆の道をひたすらに真っ直ぐ進むと、曲がり角に下り階段が見えた。これが食堂に繋がる階段だそうだ。そこを降りると話し声が聞こえてきた。

「うわぁ……………すごい……………」

「何人入るかは誰も知らないけど、1000人は入るんじゃないかしら？」

「そつえば、今ここには何人の人がいるの？」

「確か、217人だったと思うわ」

「2、200……、でも昨日はそんなにいなかったと思うけど？」

「昨日はノーマルモードだったから初心者しか集まらなかったのよ」

「ノーマルモード？」

「そ。だいたい5、6体の中級モンスターしか出現しないイージー

なミッション。ある程度強くなるとみんな参加しなくなるの」

「なんで？」

「貰える経験値が少な過ぎるからよ。他にはボスモード、パレードモードがあるわ。そのことについては食べながら話しましょう」

「いらっしゃいませ。ご注文は何になさいますしょう？」

「わたしにはBセットを」

「そちらのかたは？」

「あたしは……えつと……」

「日替わりを一つね」

「かしこまりました」

「あつ……ワン、ありがとう」

「良いって良いって」

はじめてなので何がおすすめのかわからなかったあたしのメニューを決めてくれたワン。日替わりが当たり外れないそうだ。

「おまたせしました」

「はやつ！」

料理は1分もしないうちにあたしたちの前に出された。

「さ、行く」

「で、さっきの話の続きだけど」

あたしたちは窓際の日当たりがいい席を取った。

「えっと……ボスモードとかなんとかの話？」

「そう。簡単に言うと、ボスモードはクソ強いモンスターを倒すモードでパレードモードはひたすらモンスターを倒すモードね」

「そのまんまね……」

「ただこの二つにはそれぞれレベルがあるの。難易度が高いほど貰える経験値が高いつてわけ」

「なるほど」

「だいたい2週間に一回ボスモード、1週間に一回パレードモードだから。とばされるレベルは自分のレベル相応に自動でとばされるから」

「へえ…。いつも悪いわね」

「いえいえ」

なんとなく理解したところで食事にとりかかる。ちなみにあたしの日替わりは和風の定食だった。好物でなければ苦手でもない。普通だ。

「ねえワン」

「ん？」

「あそこの中央の席のまわりは何で誰も座らないの？」

「ああ。あそこ？それはね……」

第六話（前書き）

すいません。

いろいろあつて遅れた上に短いです。

許して下さい。

第六話

「ああ、あそこはね……」

ワンがしゃべろうとしたその時、食堂が静まった。

「ちょうどいいところに」

「？」

食堂にある音は足音だけ。一人だけのものではないようだ。すると誰もいない中央の席に三人の男女が座った。

「あの三人がいるから誰も近づかないのよ」

「何で？」

「あの三人はここで四強と呼ばれている最強メンバーなの。みんな一年以上生き残ってきてる猛者よ」

「それと誰も近づかないのにどういう関係が？」

「壮絶な闘いをくり抜け過ぎて精神がおかしくなっちゃてるのよ。でもここで生き延びるのはそういう連中だから」

「そっか……」

寂しいような寒気のするような複雑な気持ちになる夏樹。しかし、

ふと疑問に気づく。

「あれ？四強っていったよね？あと一人は？」

「ああ……日高 護のことね。ここで間違いなく最強。生き残ってすでに6年。あまりに強過ぎて四強のメンバーの中でもはぐれ者になってるのよ」

「そうなんだ」

あまり感心の無い様子の夏樹だが今後日高 護が彼女にとって大きな存在になるとはこの時は知る由もない。

「あつ、やっと見つけた！」

「前川君。どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよ。俺を置いて朝食なんてひどウガアアア」

喋りかけの前川の横っ腹にタイキックをぶちかましたワン。

「何でエロキなんかと朝食を食べないといけないの？」

「ワン……やりすぎ……」

哀れ前川というような顔をする夏樹。前川は倒れたまま動かない。もしかしたら息をしていないのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4478x/>

神による戦闘生徒達

2011年11月28日01時53分発行